いばらの冠

鳥井新平

奨励者紹介[とりい・しんぺい]

日本キリスト教団近江平安教会牧師

京都教区部落解放センター主事

イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

(ヨハネによる福音書 8章 12 節)

春学期統一テーマより

春学期統一テーマ、イザヤ書2章4節は私の好きな聖句の一つです。平和に対するリアルなイメージが喚起されるからです。人殺しの道具の剣ではなく、土を耕す鋤。人を突き刺す槍ではなく、収穫物を刈り取る鎌。このイメージの転換は見事な表現です。この聖句で思い出すイラストがあります。

それは、日本が戦争に負けた後、新憲法が発布された時に、文部省が全国の学校に「あたらしい憲法のはなし」としてパンフレットにして、配布したものです。戦争放棄を説明するイラストで、もくもくと煙が上がる大釜の中に、戦車・戦闘機・ミサイル・軍艦など戦争兵器が入れられていきます。そしてその下からビル・電車・客船・消防車・テレビ塔などの平和な市民生活に益するものが生み出されているのです。一目瞭然。見事なイメージです。しかし、この流れが逆流しようとしている状況が国内外ともに始まっているのが昨今ではないか、と懸念しているのは私だけでしょうか。二日後は、6月23日沖繩慰霊の日です。

平和を願い、沖繩を忘れないために歌を一つ作りました。「沖繩」という歌です。

沖繩は ウチナー ウチナーは琉球
海の中の架け橋 命のうた きこえる

伝えたい思い 伝えたい痛み 伝えたい苦しみ

ちむぐる
肝_苦_しさ ともに

分ち合いたい恵み 分ち合いたい喜び 分ち合いたい平和

ちむぐる
肝_苦_しさ ともに

軍は人を守らず 国は戦で亡ぶ 常に富は偏り 石は叫び続ける

同志社について

もう一つ歌を紹介します。同志社が2025年の創立150周年を迎えるに際して、オリジナル讃美歌を募集したのです。私も応募しましたが最優秀賞を逃しましたので、自分で曲もつけてみました。育ちゆく樹木をイメージしました。こういう歌です。

大樹の育ち

1 よろこびよろこぶ 胸おどる 同じ志 たずさえて
今日も真理を学んで 小さな種を たずさえて

2 寒さに耐える つばみさえ 春の光に うたいたす
明日も良心 わかちあう 花咲くその日 夢みてる

3 ひとひとりが大切と 時代の荒波 超えてゆく
神の導き たぐいなし 大樹の育ち 感謝する

4 良心みなぎり 人々の 集い来たれや いつまでも
いばらの冠 かぶせられ 互いに足を洗いあう

しかし、正直に告白すると、私は同志社の熱烈的なファンではないのです。20代の時に同志社大学の文学部、60代になって同志社大学の神学部で学べたことをうれしく思っています。でも、二浪して同志社大学になんとかひろってもらった時、同志社がキリスト教の大学である事も新島襄が開祖であることも知りませんでした。入学式の時に讃美歌が歌われ、聖書が朗読された時に、初めて知り、びっくりして、だまされたと思って、式場を飛び出したのです。その後、在学中に3年間寝たきりの父を病気で失い、キリスト者の友に出会い、YMCAの活動を通して聖書の言葉に触れ、教会に通い始め、25歳で洗礼を受けました。そして、60歳で小学校の教員を退職後、同志社大学の神学部で牧師になるために編入学したのです。忘れもしません。神学部の入学式は、2018年のイースターの日曜日でした。なんで、イースターの日、大学が入学式をするのかと疑問をもって、式に臨みました。式典の中でイースター（復活）にふれられるのかと、思いきや。祈りでもメッセージでも、壇上のスタッフは誰一人イエス・キリストの復活には話題にもしませんでした。入学式で怒ったのは二度目ですが、真逆の怒り方をしている自分がおかしくもなりました。20代の時には、キリスト教であることに怒り、60代の時にはキリスト教の本質を誤魔化していることに怒りました。

私はここ同志社大学がとても大切な大学であると思っています。国禁を犯して脱藩した創立者新島襄の精神は貴重です。この自由な、人ひとりを大切にする学風が多くの藝術家や音楽家を生み出しました。思想家や社会実践家、部落解放の闘志を輩出しました。この大学に在る良心のエキスを汲めども尽きぬ命の水のようです。

私の経験した 40 年～いばらの冠がついた大釜～

最初にご紹介したイラストのイメージでいうと、鳥井新平という遊び人・放蕩息子が「同志社」という大釜に入れられて、40 年たったら、牧師になってでてきたという変容ぶりでした。そしてその大釜には、イエスのいばらの冠がまきつけられていたというイメージを今回もちました。

いばらの冠はイエスが十字架に架けられる前に、ローマ兵が^{あざけ}嘲り、嘲笑の行為として、痛い痛いチクチクのいばらで作った冠をその頭に押し付けたのでした。

『荊冠の神学』（新教出版社 1991 年）を著した故栗林輝夫さんは、このいばらの冠についてこのように書き記しています。「このいばらの冠は『恥辱と軽蔑』『呪いとあざけり』の象徴であると同時に『復活の先取り』『受難し、復活する者、受難しそれに勝利する者の象徴』であった」と。仏教者であった西光万吉がこのいばらの冠を水平社のマークにしたのは、いばらの冠が「被抑圧者の代弁」であり、「苦しむ者の直観」であったことを神学書の中に明記しています。

水上勉のメッセージ

忘れもしません。同志社大学文学部を 20 代の終わりに卒業する時、寒梅館に作家・水上勉が来て、卒業していく学生を対象に講演をしました。水上は子ども時代相国寺に預けられ、そこで修行をしていました。いつも相国寺の寺の垣根から同志社の方を覗いては、大学生たちをうらやましく見ていたそうです。そして、修行のつらさからそこを逃げ出し、後に作家となり数々の名作を生み出すのですが、私たち学生を前に、その時水上は野菜作りの話をしました。スーパーに並んでいるきゅうりもなすびも、長さや品質が管理された均一のものであるけれど、自分が信州の山奥で作っている野菜は曲がりくねり、時に石を抱いた大根がとれたりする。「君たち、これから同志社を出て社会に行こうとしているが、どうか石を抱いた野菜にならなさい」。心に残る素晴らしいメッセージでした。

石を抱いた野菜とは、いばらの冠を身につけて生きることだと私は覚悟しました。痛みと苦しみと情けなさ、涙と汗の中でつかみうる真理があると思ひ至りました。

聖書のことば

イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず命の光を持つ」（ヨハネによる福音書 8 章 12 節）。

本当の平和、真実なる日常、幸せな生活は世の光であるイエス。その命の光に出会うことであり、それは、いばらの冠を通して与えられたことを今日、一つの証としてお話しさせていただいた。それは決して武力や、競争や、格差からもたらされるものではありません。

皆さんの学びが、出会いの喜びと、他者と共に生きる社会の貢献につながるものであることを祈ってやみません。